

宗教の社会的役割と文化的機能に関する再認識

——宗教と冷戦後国際的に焦点となった問題から触発された理論的省察

張 志剛

大江平和 訳

1 本論文で省察する理論的問題

この五年間、私は「中国教育部哲学社会科学重大課題難関攻略プロジェクト——現代の宗教紛争と対話の研究」という重要課題を担当し、取り組んできた。五年來少しずつ進めてきた研究を通じて、私は、この課題がきわめて重要であることを痛感しただけでなく、省察に値する多くの宗教学理論の問題が存在することをも発見した。もしこれらの問題を一点に集約すれば、それは、グローバルゼーションやグローバル・ヴィレ

ッジという背景のもとで、とくに冷戦後の国際政治、経済、文化の構造の再構築という情勢のもとで、いかにして宗教の社会的役割、あるいは文化的機能を再認識するか、という問題になるであろう。まず簡単に説明すると、先の二つの問題についての私なりの理解は、次のようなものである。一つは、私が担当した本課題が提起する重大な現実的問題としての理解、二つには、この重要課題の探究を通じて発見した宗教学理論の問題としての理解である。

① 重大な現実的問題

米同時多発テロ事件が起こる一年前、当時、北京大学国際関係学院院长を兼任していた錢其琛副首相は、早くも次のように指摘していた。「冷戦終結後、宗教、民族問題が際立ってきており、国際的に焦点となった問題の多くは、ほとんどが宗教、民族問題と切り離せないものになってきている。冷戦後の宗教問題には次のような特徴がある。すなわち、(a) 宗教はつねに民族問題と関係している。(b) 宗教の自由はつねに人権問題と関係している。(c) 宗教はつねに原理主義、テロリズムと関係している。(d) 宗教はつねに国家の政局、民族の分裂あるいは統一問題と関係している。(e) 宗教のアイデンティティは、往々にして国家や民族の境界を越えるものである。したがって、我々は、必ず注意深く宗教問題の研究に取り組まなければならない」。

世界を震撼させた九・一一米同時多発テロ事件発生後、宗教問題の重要性と深刻さは、より広く国際社会から注目を浴びるようになり、国内外の専門家に、冷

戦前後の国際情勢の激変を振り返らせるとともに、多くの国際的に焦点となった問題と重大な紛争に対する宗教的要素の広範な影響についての再認識を促した。まさにある国際問題研究者が指摘するように、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争、北アイルランド問題、インドネシアのマルク諸島やアチェの問題、カシミール紛争など一連の政治、経済、および軍事衝突は、いずれもますます複雑化し、強まった宗教的要素を含んでいる。「国際情勢は目まぐるしく変化し、そのさまざまな変化は、宗教とは切り離せないものになってきていると言える。宗教、民族問題は、九・一一米同時多発テロ事件後、国際政治を動かす大きな原動力となるとともに、まるで痙攣のような波動を国際情勢に呼び起こしたものである」。

このことは、重大な現実的問題、すなわち、なぜ宗教的要素が、冷戦後の多くの国際的に焦点となった問題や重大な衝突に、このように広範かつ重要な影響をもたらしたのか、という問題を、我々に突きつけたのである。

② 若干の宗教学理論の問題

(1) 「宗教紛争」の提起法が、比較的単純化されたものであること。

冷戦終結後、「宗教紛争」は、国内外のメディアでも頻繁に目にするキーワードとなったが、真剣に研究に取り組んでみると、「単純な、あるいは直接的な宗教対立」というものはそれほど多くは見られないし、その規模や影響もそれほど大きくはない。これは、いわゆる「宗教紛争」の多くが、複雑で錯綜した形で現れてきていることを示すものである。実際に、国内外の理論界が広く注目しているのは、冷戦後、多くの国際的に焦点となった問題や重大な衝突には、ほとんど、看過できない宗教的要素、あるいは宗教的背景が存在するという点である。

(2) 現行の宗教的観点あるいは研究のアプローチも、比較的単純化されたものであること。

冷戦後、多くの国際的に焦点となった問題や重大な衝突に対する宗教的要素や宗教的背景の広範な影響をどう説明するのか、という問題について、関連の研究

成果をながめてみると、しばしば見受けられるのは次のような主張や観点である。第一に、「宗教の衣をまとうこと」、「宗教の旗印を掲げること」、あるいは「宗教的信仰を利用すること」などである。第二は、いわゆる「利益論」で、宗教の影響あるいは役割を、経済的利益、政治的利益、軍事的利益、民族的利益あるいは国家的利益などのような、あれやこれやの利益に帰因させるものである。第三は、「総合的要素論」で、国際的に焦点となった問題や重大な衝突は、いずれも多くの要素、たとえば国境紛争、資源の争奪、安全保障問題、政治的利益、イデオロギー、宗教的信念、人種や民族の矛盾などが交錯して形成されたと考えられるものである。

先の二つの観点については、現存するいくつかの大宗教の伝統について多少なりとも研究し、「虚偽を弄するもの」と見なすことさえしなければ、先の二つの観定の単純さと皮相性はすぐに明らかに見てとれるであろう。第三の観点についても、多少補足する必要がある。この観点は、「戦争と衝突」を論じる研究者から提起されたものであり、世界的にもこの分野では、すでに研

究者にとって方法論上の共通認識となっている。⁽³⁾このような方法論の観点は、一見したところ、比較的全面的で、さらには「隅々まで網羅されている」ように見えるが、私は、それは、宗教の捉え方において、やはり単純化されたものであると考えている。すなわち、宗教的要素と経済、政治、軍事、人種あるいは民族などの要素あるいは要因を同列に論じており、これは明らかに宗教的現象の独自性を無視したもので、「信仰としての宗教的要素」と、その他数多くの要素との相互作用やその複雑な影響を説明することはできない。

以上のいくつかの観点は、おもに国際政治学、あるいは国際関係の研究分野を風靡したものである。それでは、ここ百年あまり、宗教学界が、たえず様変わりし続け、あるいは、依然として主導的地位を占めているいくつかの理論的観点、たとえば、宗教衰亡論、政教分離論、宗教信仰私人化理論、宗教世俗化理論、宗教市場化理論などは、先述の重大な現実的問題を説明するのに十分であろうか。ここでは、まず問題提起をしたあと、分析、論評を加えたい。

全体的に言えば、まさに先述のさまざまな理論に物足りなさを覚えたことから、私は次のように考えている。先の重大な現実問題、すなわち、なぜ宗教的要素が、冷戦後、多くの国際的に焦点となった問題や重大な衝突に、広範かつ重要な影響を及ぼしたのだろうか、という問題への探究を通じて、より全面的に、より深く、宗教的現象の複雑性、社会的役割や文化的機能を認識するため、宗教学理論において、我々に多少の成果をもたらした可能性が十分に考えられる、と。ここで、皆様に、簡潔に報告したいのは、私がここ数年来、取り組んできた理論的試みであり、そのおもな手法とは、先述のような重大な現実問題のなかの「宗教的要素」という「キーワード」を把握したうえで、宗教的要素、およびそれが影響をおよぼす四つの複雑性に重点を置きながら説明するというもので、それらを「蓄積性」、「瀾漫性」、「浸透性」、および「深層性」と呼ぶことにする。

2 宗教的要素とその影響の蓄積性

冷戦後、多くの国際的に焦点となった問題や重大な

衝突は、ますます深く宗教的要素の影響を受けるようになった。これはかつてない情勢のもとで現れた新しい問題であるが、我々がまず意識しなければならないのは、宗教とは、古くて、普遍的な社会的、文化的現象であるということである。宗教は、人類社会や文化活動と長く、深い関係をもつものであるがゆえに、文化史や文明史の研究に没頭する思想家の多くは、宗教的伝統の社会的役割や文化的機能を重視している。紙幅の関係で、ここでは、アーノルド・J・トインビー (Arnold Joseph Toynbee) とクリストファ・ドーソン (Christopher Dawson) の宗教的伝統の社会的役割と文化的機能の研究における学術的な啓発について、批評、紹介するにとどめたい。

比較文明史の名著である『歴史の研究』(一九三四・一九五四) 全編に目を通すと、トインビーが心を打ち込んだ歴史の解釈の思索の道筋とは、宗教的伝統と文明社会(広義の文化)の起源の関係を系統的に整理し、人類史上に現れた二十六の文明社会を比較検討することによって、人類文明の形態が変遷する基本モデルを明らかに

しようと努めることであり、さまざまな宗教的伝統の文明形態の生成、発展、衰退と解体の過程のなかでの重大な社会の歴史的役割を深く考察しようとした。トインビーによれば、人生の根本的態度としての宗教的信仰は、それぞれの文明社会の「生気の源泉」あるいは「精神的な絆」とよぶことができるという。また、ひとたび、ある文明社会が伝統的な精神的信仰を喪失すると、必ず、新しい文明形態に取って代わられるときまで、衰退に向かい続けるという。なぜこう論じたのであるうか。トインビーによれば、数千年来、それぞれの大宗教の伝統が膨大な信徒を引きつけることができた理由は、大宗教が、それぞれに人類のいくつかのおもな心理の類型に対応し、各類型の信徒が異なる文明形態のもとで体験した情感のニーズを満たすことができたからである。また、政治、経済や文化を含む文明社会のあらゆる活動は、まさに宗教的信仰が示す生き方によって維持されてきたものである、とする。このようなわけで、トインビーは、文明形態の変遷モデルを総括する過程で、さまざまな宗教的伝統の異なる文明形

態における文化的心理、あるいは文化的潜在意識に対する深い影響に、絶えず注意を払い続けたのである。この面の考察や分析は『歴史の研究』全編を通して深く反映されている。

マックス・ウェーバー(Max Weber)と同じく、有名な文化史研究者、歴史哲学研究者であるドーソンも、宗教的伝統から近代西洋文化の起因を考察した。しかし、両者を比較してみると、ドーソンの理論の視野の方が広がりをもつ。ウェーバーの研究の範囲は、プロテスタントの倫理伝統と資本主義の精神との親和性に厳密に限定されており、ドーソンが考察しようとしたのは、宗教的伝統と西欧文化の進化の歴史との関係であった。ドーソンによれば、近代西洋文化の起因を明らかにしようとするれば、けっして宗教的文化伝統の歴史の蓄積の過程をおろそかにしてはならないとし、とくに、近代文化形成前後の歴史を過小評価してはならないとする。なぜなら、近代文化が必要とする精神の創造の力、さらには近代文化の先駆者たちをも含む力というもの、は、いずれもあの時期の歴史に育まれ、形成されたも

のであるからと考える。西欧文化史、とくに中世期文化史の全面的な考察にもとづいて、ドーソンは意味深長に次のように指摘する。いわゆる宗教とは、けっしてある抽象的なイデオロギーではなく、たんなる古めかしい精神的資源でもない。それはおもに、ある歴史に連綿と続く文化的伝統であり、無意識に感化を受ける文化的慣習なのである。しかしながら、従来の研究者は、往々にして、政治的なもの、思想的なもの、理智的なもの、などのような「高次元の問題」に注意力を集中させ、これらの問題が、悠久の歴史絵巻のなかでは、ほんの一部分を占めるに過ぎないということを意識せずにいた。実際、真に庶民や社会生活にとつて最も大きな影響をおよぼすものは、やはり文化的慣習や宗教的伝統なのである。⁽⁴⁾

先の二人の著名な学者の研究成果をまとめると、次のような理論的啓発が得られるであろう。

(1) ある特定の歴史的段階や文化的な時期ではなく、人類の歴史や文化の変遷過程に目を向けてこそ、宗教的伝統の社会的役割や文化的機能について、全面的に、

かつ深く、研究や議論ができると思うのであれば、人

類社会や文化活動に現存する宗教的要素は、ある歴史
的蓄積の結果としておもに見なされるはずである。こ
れは私が方法論からまず強調したい点である。この点
から次のように反省させられるであろう。先述の宗教
衰亡論、政教分離論、宗教世俗化理論、宗教的信仰の
私人化理論などのような現代宗教理論の観点、その研
究の目線は、おもに「西欧の近代化」という特定の時空
の範囲や、文化的な段階に限定されているのではない
だろうか。また、もしその意義を拡大解釈すれば、西
洋の宗教的伝統の社会的役割や文化的機能を、全面的
に、かつ深く認識する上で、妨げとなるのではないだ
ろうか、と。

(2) ある歴史の蓄積の結果として、宗教的要素および
その影響は、表面化するものではまったくなく、おも
に人類社会や文化的活動の深層の次元に蓄積されてい
くものである。すなわち、先述の二人の学者が探究した、
文化的伝統、文化的慣習、文化的心理や社会的潜在意
識のように、より多くのものは、無意識に感化される

形で、影響をおよぼしていくものである。

(3) 「無意識のうちに感化される」ことが、宗教的要素
やその影響の常態であると理解できるにもかかわらず、
古今東西の歴史の瀬戸際のように、人々はつねに、歴
史の転換や時代の挑戦に対応するために、さまざまな
やり方で、それぞれの歴史や文化的伝統を回顧したり、
反省したりするものである。そしてその歴史の瀬戸際
にあたっては、宗教的要素や影響も、その多くは、鮮
明かつ強烈に反映され、投影されるものである。この
ような歴史的な特徴から、冷戦後の宗教的要素やその
影響の明らかな強まりを理解できるのではないだろう
か。しかし、それと同時に注意しなければならないこ
とは、現在、宗教的要素が多くの国際的に焦点となっ
た問題や重大な衝突におよぼしている明らかな影響は、
たんに国際政治の構造の再構築という新たな情勢のも
とに存在するだけでなく、「グローバルゼーション」や
「グローバル・ヴィレッジ」という歴史的背景のもとに
現れているという点である。このことによって、グロ
ーバルな範囲から着眼しながら、宗教の社会的役割や

文化的機能を再認識する上で、我々にまだかつてない「理論のチャンス」が提供されたのである。

3 宗教的要素およびその影響の瀾漫性

前述の蓄積性は、おもに歴史の角度から、宗教的要素およびその影響を探究し、描述したものである。研究の目線を現実に転じてみると、宗教的要素およびその影響の瀾漫性は、もう一つの無視できない特徴といえよう。宗教的要素の瀾漫性は、宗教的現象の広汎性からもたらされるものである。この点を認識するのはそう難しくはないであろう。まず次の統計データに眼を通してみたい。

推定によれば、二〇〇一年までの世界人口は約六十一億二千八百万人、そのうちキリスト教徒が二十億二千四百万人、イスラーム教徒が十二億三千三百万人、仏教徒が三億六千三百万人、ヒンドゥー教徒が八億二千万人、ユダヤ教徒が千四百五十五万二千人、シク教徒が約二千三百六十八万人、各種新興宗教の信徒が一億三百万人となっている。⁽⁵⁾

以上の統計データは、世界の圧倒的多数の信徒が属依しているのは、依然として、いくつかの伝統的宗教であることを示しているだけでなく、宗教的要素やその影響は、おもに歴史の蓄積の結果として見なすべきであるという先述の特徴を証明している。また、さらに深い思索を促しているのは、昨今のように、現代的で、ハイテクの時代にあつて、意外なことに、世界にはこれほどまでに多くの信徒が存在し、それは世界人口の五分の四、すなわち八十%を占めるといふ事実である。この膨大な数字は次のことを示唆している。(1) このような広範な宗教的現象は、決して虚偽ではなく、世界中の大多数の人々の信仰の状況や生き方を如実に反映するものである。(2) さまざまな宗教的信仰の対象は、いずれも「超越した、神聖な、さらには神秘化した」ものであるが、あらゆる信徒はこのような信念にもとづいて「人生の究極の意義」を解釈し、「現世の生活の規範」を決定づけている。

宗教社会学を開いたデュルケム(Emile Durkheim)は、いち早く「ある宗教とは一つの統合的なシステムであ

り、それは神聖な事物と関係する信念や実践を統合してしまっている」⁽⁶⁾と指摘した。また、宗教社会学者のミルトン(J. Milton)は、そのあとに続いて「宗教とはある信念と実践のシステムとして定義することができ、それはある集団が人間の生活のなかの究極の問題と闘うときに用いられる」⁽⁷⁾と強調した。ここ三、四十年來、国際宗教学界で最も影響をおよぼした宗教概念の一つに、究極の関わり論というものがあるが、それは比較という手法を通して、多文化や時代を超越した観念によって、さまざまな宗教的信仰の本質と機能を把握しようとして、努めて試みるものである。その唱道者であるティリッヒ(Paul Tillich)は、次のように考えた。「宗教とは、その言葉の最も広義の、最も基本的な意味からいうと、究極の関わりである。……宗教は人類の精神的生活の本体であり、基礎であり、基盤である。人類の精神のなかの宗教とは、これを指して言っている」⁽⁸⁾。このような観点の趣旨は、いずれも次のことを明らかにすることにある。すなわち、さまざまな宗教的信仰は、広大な信徒の世界観、人生観および価値観であるだけでな

く、彼らが信奉する生き方でもある。また、宗教的信仰は、実は、あるタイプの信徒がその究極の関わりによって獲得した生存状態でもある、ということである。したがって、我々は、いわゆる宗教的要素とは必然的に、さまざまな宗教の信徒の精神的活動や物質的生活に瀰漫し、影響をおよぼしているものと判断できるだろう。

宗教的現象の広汎性がもたらす宗教的要素の瀰漫性については、宗教と民族との関係に着眼して認識することもできる。おおまかに言うところ、世界には二千余りの大小さまざまな民族が存在し、二百余りの国や地域に分布している。いまだかつて、宗教的現象が存在しない民族や国家というものが発見されたことはない。大多数の民族の宗教的信仰は多種多様なものである。例えば、アラビア人はほとんどイスラーム教徒で、ユダヤ人はほとんどユダヤ教徒で、多くのインド人はヒンドゥー教徒である、などというように、いくつかの民族はそのほとんどがある宗教的伝統を信奉している。ここから次のように判断できる。つまり、宗教的要素は、

あらゆる民族、国家や地域に瀰漫し、影響をおよぼしているもので、とくに大多数の人口が宗教を信奉している民族、国家や地域においては、その宗教的雰囲気はきわめて濃厚なものであり、宗教的要素の社会的影響、あるいは文化的機能は、とくに無視することはできない。例えば「キリスト教世界」や「イスラーム教世界」などについても、そうである。

4 宗教的要素およびその影響の浸透性

前述の瀰漫性は、宗教的要素がもつ強い浸透性を意味している。すなわちそれは、たとえば、政治、経済や文化などといった人類の社会的活動のいくつかの主要な要素に浸透し、影響をおよぼしているものである。それは、まるで「瀰漫性」という言葉が、宗教的要素は有形あるいは無形というかたちで、人類の社会生活の分野にあまねく行き渡っていることをイメージ的に表現するのに用いられているようなものである。また、「浸透性」はさらに次のことを明らかにする。すなわち、宗教的要素は、はっきりと、あるいはこっそりと、他の

あらゆる人類の社会活動の要素に浸入していき、それによって、世界観、人類観、価値観や生き方としての宗教的信仰と政治、経済や文化などの要素と融合して一体化かつ不可分なものにさせ、相互に役割を發揮させながら、影響をおよぼすようにさせる。この宗教的要素の複雑性を意識すれば、宗教的要素が冷戦後の多くの国際的に焦点となった問題と重大な紛争にどれほど影響したかをより深く考察することができるだろう。

前にも触れたように、国内外の研究者は、一般的には、冷戦後の多くの国際的に焦点となった問題と重大な紛争は、けっして「単一の原因」によってもたらされたものではなく、経済、政治、軍事、文化、民族や宗教など、多様な要素が入り交じって作用した結果であると認めている。では、なぜ筆者はこのような研究の観点による宗教への認識が安直で、浅はかすぎると考えるのか。そのおもな理由は、このような考え方は、「表象的な認識」だけにとどまっており、宗教的要素を単純に、ある相対的に独立して存在するものとし、経済、政治、軍事、民族や国家などの要素と同列に論じる問題であると説

明しているという点にあり、そこが問題であると考え
る。では、現実の状況は果たしてそうであろうか。こ
こで、二つの例証を挙げて論じたい。

周知のように、パレスチナ紛争の直接の契機であり、
紛争が長引いているおもな根源は、領土問題、なかん
ずくエルサレムの帰属問題にある。この領土の争いは、
パレスチナとイスラエルの民族と国家の生存と発展の
問題にまで及び、したがって、全体が、政治的、軍事的、
安全保障、経済や文化的などのような双方のさまざまな
利益の衝突を牽引してしまっている。しかし、更に
複雑なのは、それが宗教を背景として発生し、持続し
ている領土の争いであるという点である。圧倒的多数
のパレスチナ人はイスラーム教徒で、イスラエル人は
ほとんどがユダヤ教徒であり、エルサレムは、衝突す
る双方の心のなかで決して喪失することのできない聖
地である。ハンチントンが次のように指摘する通りで
ある。「紛争の焦点が宗教的な問題に向けられると、そ
れは勝つか負けるかの争いになりやすく、妥協をはか
るのが難しくなる。エルサレムの神殿の山を支配する

のはユダヤ人なのかイスラーム教徒なのか、といった
ぐあいに」⁹⁾

以上の分析から次のことがわかる。パレスチナとイ
スラエルの紛争という調停しがたい領土の争いのなか
で、いわゆる宗教的要素は、けっして単独で現れたり、
局部的に作用したりするものではなく、「紛争全体に独
特な雰囲気」を醸しだし、領土問題、民族間の矛盾、経
済的利益、政治的相違、文化的差異などのような、そ
の他の多くの紛争の要素を、すべてそのなかに覆って
しまう。そして、いずれも、ある程度、宗教的要素の
重要な影響によって浸透され、その制約を受けること
は免れない。国際的に焦点となった問題と重大な紛争
に関する研究についていえば、もしパレスチナとエル
サレムの領土の争いを一典型としてみれば、ここで明
らかにしている「宗教的要素およびその影響の浸透性」
は、「宗教的背景や雰囲気」の、国際的に焦点となった
問題と重大な紛争への影響の所在をより深く理解する
上で、はたして役立つだろうか。この点を実証するた
めに、続けて別の実例を挙げてみよう。

アメリカは、ブッシュが言うように、神からの特別な使命、すなわち世界中に自由と民主主義を伝えるという使命を賦与されたのであるうか。これはオルブライト (Madeleine Albright) が、近著『強国と全能の上帝——美国、上帝和世界事務沈思(強国と全能の神——アメリカ、神と世界の問題の思索)』で省みている問題である。宗教的伝統の「アメリカ的な視点」への影響、キリスト教右派のアメリカの政策への影響、ブッシュ政権の九・一一米同時多発テロ事件への対応の成否、イラク戦争の挑戦、およびイスラーム世界の重要性など、多方面からの考察と分析を通じて、このアメリカ元國務長官は次のように結論している。「アメリカの政策決定者は、他人をあまり立てたり、アメリカによる行動の受容の可能性をはやしたてたりする等の面において、宗教がもつ力と作用を理解せざるを得ない。また、宗教と政治はたんに切り離せないばかりか、両者は結合され、適宜利用されており、一つの正義と平和の勢力とすることもできる」⁽¹⁰⁾。

ドイツのゲアハルト・シュレーダー前首相は次のよ

うに振り返る。九・一一米同時多発テロ事件後、ブッシュ大統領は、我々と何度も見するなかで、重ねて自分は敬虔な信徒であり、最高の権力者である神の思し召しにしか服従しない、と述べていた。ブッシュ大統領は、二〇〇二年一月二九日の演説のなかで、そのほとんどを『聖書』による言葉を用いながら、イラク、イランおよび北朝鮮を「悪の枢軸国」とし、それらはアメリカの次なる軍事攻撃の目標であると公言した。シュレーダー前首相は、次のように指摘している。個人の生活について言えば、もしある敬虔な信徒が祈りによってその自らの行為を決定づけるとしたら、それは理解できる。しかし、ブッシュ大統領が公言するように、その政治の政策決定の合法性が、神の思し召しからきているとすれば、それは大問題である。なぜならば、これについては、他人からの批判が許されず、ましてや、他人との意見交換を通じて変えられるものではないからである。シュレーダー前首相は、この点について次のように反省している。我々(おもにEUの首脳を指す)は、みなアメリカの宗教、およびその道德説教の役割を過

小評価しすぎたようである。新保守主義の知識人やキリスト教原理主義者によって形成された政治集団は、アメリカ国内の政治や大統領に強大な影響力をもち、「ブッシュ個人の妖怪化」が、批判的態度をもちながら、我々がこの政治集団について研究することを妨げてしまったのだ、と。⁽¹¹⁾

5 宗教的要素とその影響の深層性

宗教の文化の深層への影響について、ティリツヒは、以前から次のように指摘している。「究極の関わりとしての宗教は、文化的意義を付与された本体であり、文化とは、宗教の基本的関心が自己を表現する形式の総和である。かいつまんで言えば、宗教は、文化の本体であり、文化は宗教の形式である」⁽¹²⁾と。彼は次のように説明している。さまざまな宗教的行為は、それが個々の内心の活動であれ、組織的な集団行為であれ、いずれも文化を表現形式とするものである。言い換えれば、さまざまな文化的活動は、たとえ、人類の精神の理論的機能あるいは実践的機能からおこったものであった

としても、いずれも究極の関わりを反映しないものは皆無なのである。

宗教的伝統という文化的意義や社会的機能の研究について言えば、ここ三十年間、最も重視されてきた理論的成果は、おそらくクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）が提起した「文化の意味のパターン理論」であろう。この理論は、堅実なフィールドワークや透徹したケーススタディにもとづいて、「象徴的意味システムとしての宗教的伝統」が、いかにして蓄積され、ある文化の地域の世界観と価値観を形成し、無意識に感化しながら、ある民族集団や社会集団の生活の心理的傾向および行為の動機に影響をおよぼしているのか、という問題を、より具体的に、そしてより深く、明らかにしている。ギアツは次のように指摘する。「ある宗教は、（a）一つの象徴的システムであり、その役割は、（b）人々のなかに強力かつ普遍的で、持続的な情緒と動機をつくり出すことにあり、その手法は、（c）存在するあらゆる秩序の多くの観念を系統的に明らかにすることである。それとともに、（d）これらの観念に実在性

を賦与し、このような雰囲気は、(e) 先述の意義における情緒や動機を、見たところ、唯一、真実のものであるかのようにしてしまうことにある」⁽¹³⁾と。

以上の研究成果は、必ずしも完璧なものとはいえないし、あるいは、「宗教的決定論」のたぐいの理論的ミスを犯しているかもしれないが、その合理的な内容について言えば、間違いなく啓発性に富むものである。二つの基本的理論の探究の角度、つまり宗教的信仰の「本質」と「機能」から、宗教的要素およびその影響についての認識を深めることができるであろう。先の議論から明らかにになったことは、いわゆる宗教的要素とは、たんに、ある宗教そのものを指すのではなく、数多くの異なる宗教的信仰の人類文化や、社会生活の分野における反映、あるいは表現を広く指すものである。そして、宗教的要素の影響とは、おもに宗教的信仰の文化的機能や社会的役割を指すものである。学理から言えば、物事の機能や役割はその本質によって決定づけられ、現実の社会生活における宗教的要素もそうであるはずである。したがって、もし比較研究から言えば、

さまざまな宗教的信仰は、「究極の関わり」として定義できるし、あるいは通俗の概念から言えば、究極性、絶対性や神聖性をもつ世界観、人生観や価値観を指しているといえる。してみると、本論文で探究しようとする宗教的要素およびその影響の深層性を理解するのはさして難しいことではないであろう。

ここで「深層性」という語を用いたのは、おもに次のことを強調したかったからである。宗教的要素は、宗教的信仰の現実の反映、あるいは社会的表現であるがゆえに、さまざまな宗教の世界や人生に対する根本的な見方やその価値の志向性を深く含んでいる。したがって、このような要素は、深層の次元や根底から、人類の政治、経済や文化活動、とりわけ、社会团体、党派、人種、民族、国家、国連や国際組織などのような、濃厚な宗教的伝統や、信仰的雰囲気におかれた社会的行為の主体に、無視できない重要な影響を与えている。宗教的要素のこのような深層への影響は、宗教的要素およびその影響が、何をもつて蓄積性、瀰漫性、浸透性をそなえるのか、という先に挙げた三つの特性を、

より正確に理解させてくれるだけでなく、それと同時に、宗教的要素の冷戦後、国際的に焦点となった問題と重大な紛争への影響の所在について、より深く認識させてくれるであろう。

6 未成熟で簡潔な結論

これまで二十数年間、私はおもに宗教学理論と方法、および宗教哲学という二つの分野の研究に取り組んできた。したがって、ありふれた、あるいは強烈ともいえる、理論に対する興味から先の四つの特性を考察した。私が考えるに、もしこの四つの特性が成り立てば、このような学理的な考察は、もしかすると、長く風靡した、宗教衰亡論、政教分離論、宗教信仰私人化論、宗教世俗化理論、宗教市場化理論などのような宗教的観点を、方法論上から反省する上で役立つかもしれない。なぜならば、これらの観点は、宗教的要素の冷戦後、多くの国際的に焦点となった問題や重大な衝突に対する多大な影響を説明できなかっただけでなく、長期にわたって、宗教的信仰の社会的役割や文化的機能を軽

視し、ひいては無視してきたからである。

以上は、簡潔な報告であり、未成熟な試論でもある。専門家、研究者の皆様方の忌憚のないご意見、ご批判を賜りたい。

注

(1) 銭其琛著「当前国際関係研究中的若干重点問題(当面の国際関係研究における若干の重点問題)」『世界経済与政治』、二〇〇〇年第九期を参照。

(2) 陸忠偉著「国際衝突中的宗教因素(国際紛争における宗教的要素)」、中国現代国際関係研究所民族与宗教研究中心著『世界宗教問題大聚焦(世界宗教問題の大きな焦点)』、北京、時事出版社、二〇〇三年、「序」、一・二ページを参照。

(3) 有名なカナダの国際政治学者であるK・J・ホルステイ(Kenneth Holsti)は次のように指摘している。「数年前、衝突、危機や戦争の研究者たちは、ある共通認識に達した。それは単一の原因による説明は、理論上であろうと、経験上であろうと不十分であるという点である。」(ホルステイ著『平和与戦争…一六八四・一九八九年の武装衝突与国際秩序』、王浦劬等訳、北京、北京大学出版社、二〇〇五年、三ページ。

(4) ドーソンの上述の観点は、詳しくは『進歩と宗教』、『宗

教と近代国家」、『宗教と文化』、『中世記論文集』、『宗教と西洋文化の発祥』など多数の著作を参照。また、拙著『宗教と文化学導論』第四章「ドーソンの文化史学」も参照。

- (5) 『国際宣教研究学報』(International Bulletin of Missionary Research) 11001・1。

- (6) Emile Durkheim, *The Elementary Forms of the Religious Life*, New York: The Free Press, 1965, p.62.

- (7) J. Milton Yinger, *The Scientific Study of Religion*, New York: The Macmillan Company, 1970, p.7.

- (8) Paul Tillich, *Theology of Culture*, Oxford: Oxford University Press, 1959, pp.7-8.

- (9) サミュエル・ハンチントン著『我々は誰? 美国在国家認同問題上面臨的挑戰』(訳者注——原著は『Who are we? 邦訳は、鈴木主税訳『分断されるアメリカ——ナショナルアイデンティティの危機』、集英社。引用文の日訳は邦訳四九三ページに拠った)、程克雄訳、北京、新華出版社、二〇〇五年、二九七ページ参照。

- (10) Madeleine Albright, *The Mighty & the Almighty: Reflections on American, God and World Affairs*, New York: Harper Collins Publishers, 2006, Abstract.

- (11) 以上の概述について詳しくは、デアハルト・シュレーダー著『抉択——我的政治生涯(選択した私の政治のキヤリア)』、徐静華・李越訳、上海、訳林出版社、二〇〇七年、第四章「九・一一事件及其後果(米同時多発テ

ロ事件とその後の悲しき結果」を参照。筆者がおもに依拠したのは、九一、一一〇、一一三ページ。

- (12) Paul Tillich, *Theology of Culture*, p.42.

- (13) Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures*, New York: Basic Books, Inc., Publishers, 1973, p.90.

(ちょう しゅう)／北京大学宗教文化研究院院長
(訳・おおえ へいわ／東洋哲学研究所委嘱研究員)